

913.5
マ
前編 3

松浦佐用媛石魂録

前編

三

止

松浦佐用媛石魂録前編下卷

東都

曲亭馬琴編次

第九

龍神洞に孤客命と知る

太宰府の守護。平經高が股肱の家隸。牛淵九郎清繩と云ものありけり。原是何等の人な
 りと。其素姓と尋ぬる。父の岬平馬清麿とて。三浦泰村が譜代の郎黨。忠義無二の者なり
 し。然るに泰村の。後深州帝の御宇。賢治の始め。北條一家の威權を招き。謀反の企ありしこ
 ろ。清麿屢々主と諫。終に用ひられず。却出仕を留められしかば。平馬の痛くこれと歎
 死。忠臣面と犯して。君と諫るに。其言用ひられず。縦眼睛を東門に掛るも。又何の益ありあ
 らん。只身を殺して。君がミづりなせ給襖を褰ひ除んぬ。と深念。一封の遺書と寫留
 め。腹かき切て死にけり。清麿が死後。彼遺書を披露せし。雖も。泰村終に逆意を思ひ留まる
 氣色なし。まうのあれ。其鯁忠と憐れけん。清麿がぬさりの子どもを扶助。恩惠願厚かり



けり。さる程に寶治元年六月五日。泰村儀頃親族を令々軍兵を召集執權時頼朝臣の所へ押寄。勝負と一時決せん。と計較たるが。輝忽地に發覺て。その日の軍利あり。泰村父子主従。幸ひて法華堂に引退た。皆悉く自殺せり。かゝりしうば。岬平馬清藤が子供。冢子の女兒も。次男と淵九郎といふ。年おほ幼た。母も去年の秋身まか。父を此春自殺せ。よるべな孤孤ある。主家さへ滅亡しつ。謀反人れ餘類取りと。日米親一方も疎き。いと詮術なかりしか。同胞泣々鎌倉と迷ひ出。些の由縁と便りて。攝州尼が崎も。赴き。浦人の奴婢とありて。形おたせと送りた。こゝにおあること十斗あまり。艱難憂苦の中。一人とおまよけるが。淵九郎の稚たより。其志還しく。潛し思ふやう。己が身命運薄く。去り。濟世と扶。斯民間に零落して。人の奴僕とあり。狂人等と掠役せらる。と雖も。父の泰村ぬ。これ忠臣たり。加藤三浦岬の元親族より。外様の家隸と同ぐからず。されば。己れいかもして。鎌倉と政滅。亡君の仇報い。と思ひ定め。おがら。姉の心中の機密を。とせむ。ある日同胞。人おた處に集合て。行末来しか。この事を語り。はるくる序。淵九郎が云

やう。姉御の年も。己れおの十あまり増。おのまれば。昔鎌倉おありける日。此景迹も。とさ。記て。おのまらめ。己が身の何事も。夢のやうお。父母の面かげさへ。定々おの認り候。いひど。さしも三浦の忠臣と呼ま。さる人の子と。沙風吹く。徒お浦曲の持と事。として。生涯と過さん。最朽とし。西國の菊池原田など。て。名だるる武士も。多ければ。同胞諸共に。彼地お赴た。縁とも。とめ。主どりせ。やと思ふ。あり。思ひさ。ち給へ。うし。と云。お。姉も。年米淵九郎が。志大。おして。もの。と用。に。とつ。べき。者。なり。と見。け。れば。とも。かく。も。よ。お。お。計。ら。ひ。給。へ。と。應。か。バ。淵九郎。大。お。お。歡。び。主。人。よ。の。故。郷。へ。立。歸。り。親。族。に。對。面。し。て。父。母。の。墓。へ。詣。て。後。お。又。歸。り。来。べき。よ。し。と。い。ひ。お。し。ら。へ。お。む。し。身。の。暇。と。給。は。る。べ。し。と。云。お。主。人。聞。く。後。等。の。年。米。信。や。う。に。仕。さ。る。もの。お。れ。ば。と。て。心。よ。く。是。を。放。し。東。へ。の。道。も。お。る。け。し。是。も。て。ゆ。お。ね。と。て。路。費。よ。お。程。に。と。ら。す。る。お。が。同。胞。い。よ。く。歡。び。聞。え。と。遂。お。尼。が。崎。を。旅。ご。ち。東。へ。の。赴。す。して。只。顧。西。と。斥。て。ゆ。く。程。よ。日。と。經。る。長。門。なる。赤。間。が。関。まで。来。よ。け。る。さて。此。津。より。便。船。お。り。豊。前。の。小。倉。へ。渡。ら。ん。と。し。は。る。夕。忽。地。姉。と。見。失。ひ。と。大。き。に。驚

た。彼此と索めぐりて。其日、遂に舟に乗らず。次の日も。又浦曲小浴て。竹崎室津。畑住新五
宇加。瀧口。神田。阿川の湊々。と索呻吟。是首彼首。二三日を費せと雖も。絶く姉に疎會す。
ここに至く。瀧九郎。大に後悔し。己れ不幸ふして。尤やく父母を喪ひ。姉の養育と受く。其
恩父母。異なる。あらず。あつると。青雲の志。己難くて。遠く西海に漂流し。思ひの外に同胞離
散して。姉の往方と知ず。かゝれば。再會も。又計難し。縦一旦。志と得く。蘇張が列國の印と
帶るの日ありとも。姉の高恩と謝する事と得ず。益なれは似たり。よくなや。住かれざる
津國と。漫に迷ひ出さればこそ。亦一層の憂苦とませ。只此上。神明佛陀の冥助と禱るに
非ず。姉の往方と知難うるべしと。此日より。道次ふと。し給ふ。大小の神社へ。必らず
詣で。祈念を凝らしつ。隈川のおおと。向と云所。長やうに。海へさし臨たる出崎なり。此
己さりに。龍神の洞と云あり。又龍燈の松として。最ぬりたる松ありけり。渡海の船も。風濤の
難ふあふ時。かの洞に祈禱に。必らず。應驗あるよし。浦人の物語に。瀧九郎不圖聞。聽
く。件の洞に參詣し。祈願する事前の如く。殊更に丹誠と凝らしけるに。頃しも。三月の下旬。あ

れば。海上。日和。あつらふして。風景。えもいれず。長途の疲勞に。思ひをも。彼龍燈の松。が林
と。枕として。あべし。目睡さる。枕邊に。人ありて。瀧九郎。と。と。呼び。覺を。醒せし。う。や。と。ら
頭と。撞け。見う。へれば。白髮童顏の翁。端然と。一。傍に。居。尻。と。かけて。あり。被さる。衣。の
海松の。如く。かき。垂。されど。其。文。も。未。だ。見。も。馴。ざる。錦。袴。の。類。も。光。曜。くと。魚。の。鱗。め。た。と
る。手。も。さ。る。杖。の。朱。より。も。赤。くて。珊瑚。の。彷彿。さ。り。瀧九郎。深。く。怪。し。み。この。翁。の。凡。人
から。と。思。ひ。し。う。は。岸。破。と。身。と。起。て。其。好。と。り。一。躡。踏。し。つ。翁。の。熱。と。瀧九郎。と。視。く。云。や
う。壯。佼。汝。の。志。大。い。な。れ。ど。も。惜。ら。く。い。命。運。甚。薄。し。え。一。志。を。轉。し。く。名。利。と。索。泥
中。の。尾。と。曳。ん。よ。い。齡。百。歳。の。上。壽。と。保。ち。人。の。爲。に。尊。敬。せ。し。る。べ。し。又。宿。志。と。轉。し。得。ず
し。頻。に。暴。慢。と。放。し。し。名。利。兩。取。ら。ず。懸。念。せ。ば。其。事。成。さ。る。の。と。あ。ら。で。年。四。十。と。越。難。か
らん。と。ま。れ。か。く。ま。れ。今。よ。り。廿。年。と。經。く。始。めて。姉。に。あ。ふ。時。あり。己。れ。見。る。所。ある。と。も。て。汝
は。一。卷。の。秘。書。を。傳。授。す。べ。し。汝。が。才。と。も。熱。讀。み。天文。地理。卜。筮。觀。相。の。更。なり。兵。家。の。大
事を。開。悟。し。又。間。諜。の。奇。術。が。得。つ。べ。た。あり。只。其。業。成。就。を。と。雖。も。これ。と。用。る。所。あり。僅。し

龍神洞
清繩異人
あふ



龍神の洞

東京金玉出反社

龍燈松

牛洞九郎清繩



賣下して。一己の口と餵ふに足るのミ強く其術と放して。夙志と遂んと致す時の身を亡
 走も又其術はあり。劣思ひ慎く。己が教は情をせむ。と説示し。聽て傳より。一卷の秘書と
 とり出で通與せしかば。淵九郎深く歡びて。數回押戴た。其計らすも。かゝる賜と受候は
 おでう等閑は思ひ候べた。願くは己が師。明白は名氏をあらし給へらうと云ふ。翁微笑て
 己れの名もなく家もおし。汝が先祖は因あるともて。言こゝに及ぶのミ。といひも終らす。白
 波高く磯と洗ふて。發と群とつ水鳥と共に。翁の怨地金光と放ち。打うへを浪と踏で。往方
 もあれをなりにた。淵九郎の忙然と。あむし其方と目送つ。己れもあらず。ついあさる。
 時は海上浪おさまりて。夕陽西は没んどは。其時淵九郎の。小膝を磯と拍。げは思ひ出せし
 ことおそあれ。己が曾祖の。三浦分義明の庶子なりしが。其母ある日岬の磯邊は遊び
 感ずる事あり。終は有身て。産さる子の腹下に鱗ありしう。是必ず龍神の子ならんとて。
 岬龍村と名づけさるよし姉の物語にてありぬ。然るは彼翁其名と問れ。汝が先祖は因
 ありと答さる。疑ふべくもあらぬ。龍神なり。己れうく向後の吉凶と示され。いよと命運

の薄衣を去りながら。おは大事と思ひ企るとも。頼もいからず。己なんくとひとりごち
 て。遂に夙志と轉し。只世は安らに送らんと思索一つ。直に九州は遊歴去て。潜し件の秘書
 を熟讀し。やゝ發明する所ありて。天文地理卜筮祝相。軍學の奥旨。問諜の奇術とよくはと
 雖も。龍神の教と守りて。一さびもその術と施さず。ゆたかて。筑紫の太宰府に到り。岬淵
 九郎を更て。牛淵九郎清繩と名告り。賣下して生活と走る。其卜所。露ばかりも達ざり
 しかば。諸人深く尊信して。今の世は指の神子なりと稱讚を。然れども清繩の謝儀を受るこ
 と。僅は十錢と定めて。其餘を食らす。只管清貧を樂ま。こゝにある事廿年に及び。太
 宰の經高謀反の企あるより。をべて一藝ある者と扶持をる。清繩が事とよくありて。
 頻は是と招けども。牛淵九郎の深く推辭て。招たは應ぜざるを。經高は禮儀と厚くして。其
 使節三度お及びしかば。牛淵九郎脱るゝに言語なく。とさまかうさま思ひとゆさひ。が年
 未筑紫はありて。世渡をなる。威徳ある人お招れて。一度も行。これと謝せず。却失敬
 の罪と責らるべしと思ひて。聽て城中に赴き。經高が老臣に就て。日米の恩惠淺うらざるよ

一を聞へあぐるに。經高の牛淵九郎が来れり。と聞て大に歡び。よりぬく城中に留る事三日
さまぐみ餐應さ。老臣更るぐに。利害と説まげて守護の渴望に應給へ。斯てもあは
推辭給ひ。生涯此城中より外へ。出さずと云ふ。清繩は斯町寧なるに心よく覺る。己と
得ず。あぶく。主君と頼を奉るべしと應たり。さる程に經高の牛淵を後廳に呼び入
る對面。見參の引出物として。鎧一領太刀一振。鞍おさる馬一疋を賜て。てづらう盃と
あげ。餐應初めに彌増より。其時清繩は。はくぐと經高が相をみる。謀反の氣あらわれ。ま
うも事と遂べき人。あらざれば。意の中大に驚れ。只管後悔をとり。うと既其招に應
じて。言下には是を違背せば。忽地は罪せらるゝのミおらず。死後おほ胡應なるべし。これ思
すも。范増と恨と等くをる事よ。と嗟嘆して。命運の係る所。今にかうと思ひ諦め。遂志と
傾く。任が。經高果え。いく程もなく謀反と起し。清繩をもて軍師とを。されば清繩の機
に臨。變に應じ。屢々謀と述る。經高は。其人となり。識量狭く。人疑と決斷なれば。
其謀を用ひず。清繩大に焦燥て。手勢僅に二三百人と將て。肥後國に押渡り。菊池原田と攻

靡。肥前の飛蘭渡ふ。紀して。勢を九州に振へり。然るに。北條上總が實政。執權時宗朝臣
の命と裏て。鎌倉と進發し。船路より肥前國に赴き。矢田の津に陣と布。直に清繩を討んと
す。清繩縁由と聞て。實政の軍配。侮難く思ひ。か。徧々進を戦。兩陣巨海を隔
つ。疾視あふて。徒に日と過し。え。其年も暮て。新玉の春立ち。へりよけれど。寒さ牙まさ
りて。雪降續たされ。敵も身方も最徒然不堪。此時瀬川来女吉次の。大將實政は密語てい
へり。たる。反間牛淵九郎清繩は。不測に問謀の術と得たりと云ふ。彼去年より一たびも
寄せ来ざる。必定別に謀あるぬるべし。常言に。芭外の犬は。お防べし。壁隙の風は。乘
が。といへり。牛淵尙潛入。不虞の事あら。勝と墮とも及む。大將は。今宵より某
と臥房と換。睡給へ。幸に子密が便室の禍を脱。給ふべ。たものを。信どちていふ
實政聞て。去。尋思。示さるる所。理あれど。初め備を。はく。るもの。を。お。不仁ありと
い。む。然るを。わが。身。の。厄。難。と。避。んと。て。人。と。危。た。代。を。任。事。の。勇。士。の。せ。さ。る。所。な。り。と
四。答。て。承。引。氣。色。あ。ら。り。か。バ。吉。次。重。ひ。て。然。ら。ば。近。曾。陣。中。に。罪。ある。者。の。死。刑。被。放。し。是

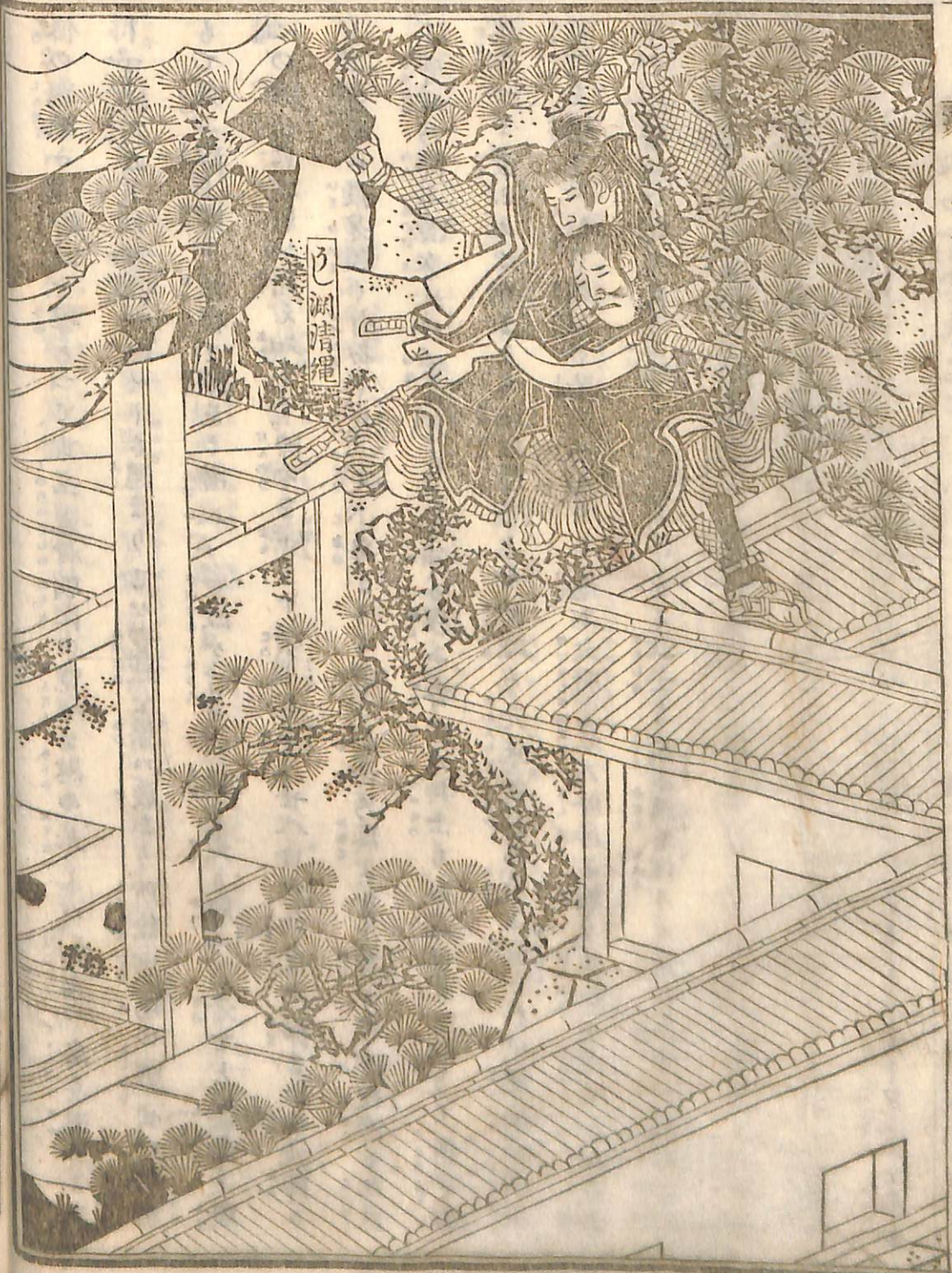
ともてかいら給へ。かくする時。其人牛淵が爲ふ命を預るるも。恨あるべし。も
幸よして。敵の刃と腕なば。九死と出く一生と得。あかく自の罪と贖ふ足らん。まげてあ
計らひ給へうと云ふ。實政やうやく諾をひて。近曾令と犯して。其罪。死に當る者の年紀
貌粗大將は肖たるを擇み出して。其罪と放し。密やうは輝の趣とあらする。其もの歡で命
と稟。毎夜は大将を代。其臥房は睡りつ。吉次又壯士二三十人を。帷幕の中は伏て牛淵も
忍び入らば。引裏と討取べきよを聞え知。其身は出居の方。少く引入る處は直寝して。
通宵睡らず。實政又士卒は下知して。毎夜は符を焚し。ミづうら四隅とうち巡りて。用心極
て堅固なり。さる程牛淵九郎清繩は。去年より飛龍渡ありおがら。實政の大軍は比まば。
己が衆は十が二三ふて。勢ひ當り難く覺らう。敵の寄ざるを僥倖ふして。一とびも動らむ。
つくづくと思ふやう。これ其始め。經高は職されて龍神の教誡不悖。遂に五斗米の爲ふ腰を
折るのさちらむ。此度の大事は與りて。百戰百勝の奇計を述る。經高暗愚ふして絶て用
ひむ。これに彼人譜代恩顧は家隸もあらねど。とてもかくても死をべた身なり。せめて北

條の親族たる。實政と撃とつて古主泰村朝臣の冤魂を慰め奉らば。初志の志を遂る。一
。且經高ぬいの謀反と起せしを怨なり。己が實政と撃に義あり。所詮廣場の戦せば。寡を
もて衆に敵し難し。只夜は紛まき潜入り。實政が首を引捉。走り歸らん者。と深念し。腹
心の兵士に機密を聞え知して。陣中を守らう。頃も正月廿八日の烏夜の。第まつ雪乃降ら
ら。清繩は最身軽く打扮。只一人小舟より乗り。矢田乃湊まか渡りて。小夜深る。比及
し。實政乃陣に潛寄れば。雪のまをく。降る程。番次乃兵士も。おらづうら懼りて。所々小
集合つ。最末めやうち相語辭乃を。清繩も。元米問謀乃術も長されば。鹿垣と跳踰
鞍門を過りて。斬く奥深く忍び入りつ。遂に大將實政乃臥房に到り。忽ち其首をかた落
し。頭髪かい廻て走り出る。帷幕乃中なる壯士も。頻に睡を催して是と知す。只瀬川吉次
乃。睡魔を退け。孤燈乃下。史記乃刺客傳と聞て居りける。忽ち此癖者ありて。假實政
乃首を引捉。外面へ走り去ると。吉次倍と見。をいや牛淵ごごなれ。と叫びもあへず。幕直小
飛らりて。盃子鐵入たる頭巾乃鈕を。無手ととりて引うへさんと走る。豫う忍緒と放む

世のうらやま
瀬川采女
夜半の淵を
追ふ



月洞清繩



死さるよや。仰さほふ引外して。頭巾を吉次が手に残り。清繩はえや。鹿垣小走り登まは吉次
 大に焦燥。太刀ふ著さる小刀を脱出し。追ひつ、丁と打かくると清繩を物ともせざして。
 是と袖ふ受留。やとら垣を踏こえて脱出さり。こ乃群響ふ宿寢乃壯士番次乃兵士驚死
 駭て手ふく器械をとつ。追蒐んと聞くと。吉次見うへりて牛淵とバ。己れ追留て撃とる
 べし。おのくはえやく路を斷ふとぞて。這奴は飛蘭渡へ歸さざれやうに。手配去給へとい
 ひうけて。角門と押開死。飛が如くに追くゆく。大將實政縁由と聞て。尋て謀つる事をなれば。
 俄頃ふ軍兵三手に己け。其一手の清繩が歸るべた路と遮り留さし。又一手の兵士の残し
 留めて。陣中と守らし。残る一手の軍兵と將と直に飛蘭渡へ押さり。清繩が陣を攻破り其
 包を抜んとて。馬に閃りとうち跨。鞭杖鳴らし。深雪と路。托ふ搦て走出まば。主に劣らぬ
 壯士ども。ミな後まどと引添たり。斯て瀬川采女吉次の頻りに牛淵清繩と追蒐く。や、間近
 くなる程に。牛淵の疎林の中へ走り入りて。忽地見へずぬりしうば。吉次ままく。焦燥く雪
 に叩さる足跡を示ふし。おほ何處までもと追蒐たり。さても牛淵九郎清繩は。輒く實政と撃

とりぬ。と思ひいかば。敢戦と好まむ足信一と脱走り。あまりに烈しく追ましくむ。彼と
 違過さむやと思ひて。道もなれ山路に向ひて。徒に足跡と残し。逃逃して立戻り。道と横さ
 まに。徑にかゝる。踏さる雪を掻埋めは。漸くに吉次と出抜て。直に飛蘭渡へ歸らんとす
 る。實政の軍兵、ゆく先は充満く。遂に歸る事と得ず。夜のほのくくと明あさりて。沖の方
 と信と見れば。飛蘭渡の陣も。えや攻落されぬとおぼしくて。水鳥影。こかたを投して飛來る
 ほど。清繩大に疑惑ひ。躊躇して思ふやう。實政の軍監は。瀬川采女吉次と呼る。もの。年
 弱々れど。智兼尋常に非を。軍慮孫吳武學ぶと聞し。果して敵の備あり。も一。大將實政は。撃
 れららば。陣中以外の外に。騷動をべた。却て。歸る路と遮り留め。主將のなれと知く。飛蘭
 渡と攻落したる軍記。甚奇なり。然れば。此首も。實政のありて。廢物はありけるうとて。は
 らく見るに。枯首ぬれど。其骨相匹夫の面影ふあ。大將の首級ふ非ず。さては。謀策られさ
 る朽とさよ。とひとりごちて。蹠をれども其うひさし。こ、よ至つ。いよ、龍神の教誡
 露むうり。え錯さると感嘆し。嗚呼。己れこゝに死んう。といつ。余さる首と雪中に撲地と投

捨。又道ととつてかへ。末の龍華の方へ走りけり

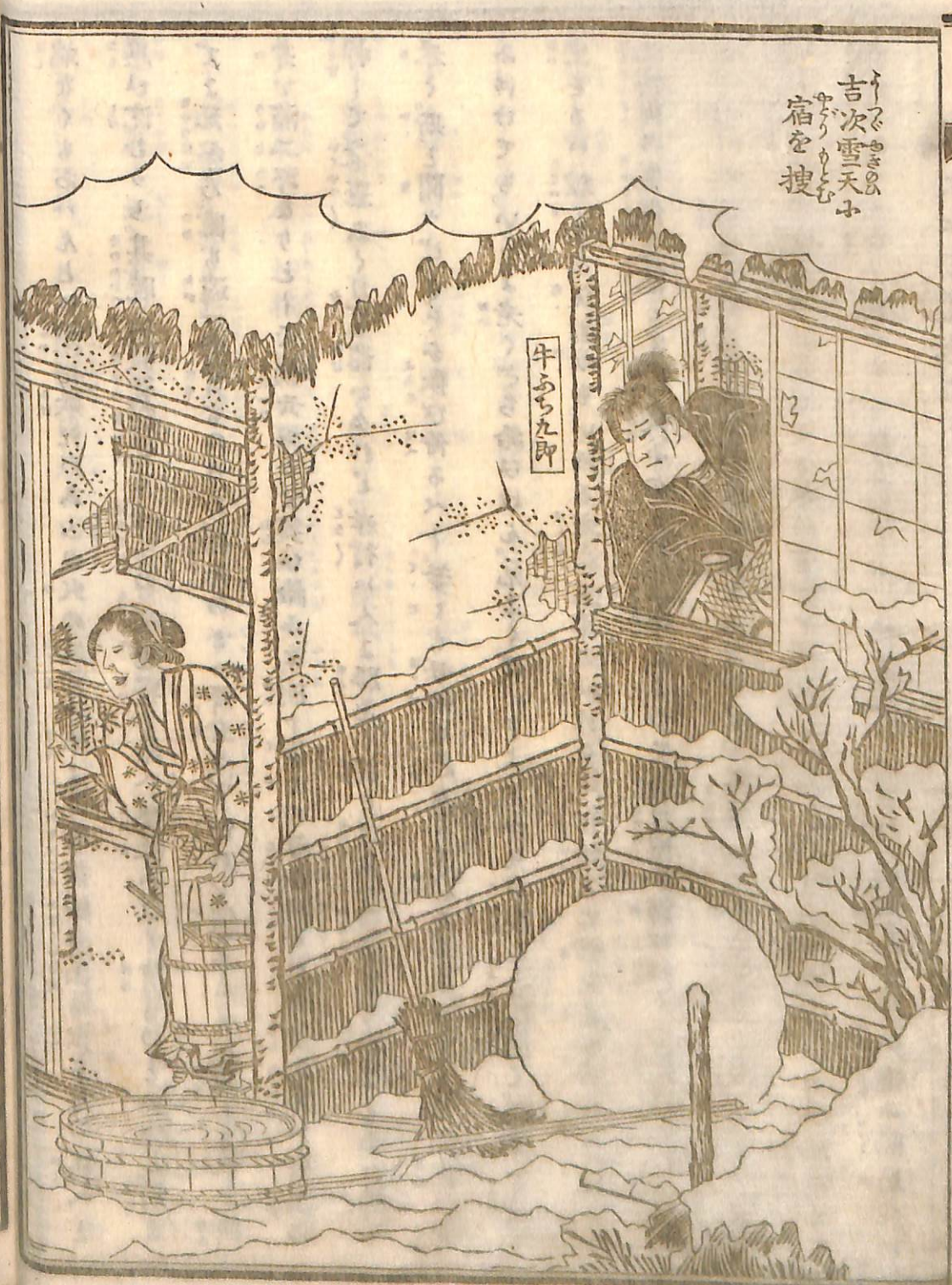
第十 末龍華の親族全く聚る

明きば正月廿九日の早天。北條上總公實政。瀬川采女が謀ふよつ。牛淵が飛蘭渡の屯と擊崩し討とる所の首級と秋梟。さう暗号の蜂影もて。矢田の身方へ知しけり。かこりしうら瀬川吉次の清繩が陣。既破きたるを知。海をく勇まさち。頻に牛淵と追詰り討とらんとして。おは彼此と徘徊する。野も山も白妙の深雪の外。物もなく。斥て行方も覺束取くて。不意も末の龍華も迷ひ出たり。通宵走りたるに。痛く餓て寒堪難ければ。道次ある草舎に立寄り。斜なる片折戸とほとくと打敲ふ。裡より老女の聲して。誰と問。吉次答へ。是の深雪は道を迷ひて。餓に臨る者なり。あべい慰して。一碗の糍を恵み給へ。翌日必ずす。厚く報ひまべたふと云を。件の老女聞もあへず。阿々どうち笑ひ。あふ己が子。えや歸りたる歟。いつまで童めたさる正な事して老なる親と誑れ遊ぶ。疾々裡に入れりし。と云。吉次の其心と得ず否これ。近曾東より采れる者なり。そねとこそ。正な事いへ。これい

でり人と誑くべた。と吹けば。老女のまをくうち笑ひて。汝の叔父も勸んとて。酒を買出さる。人ふも進で。まづ痛く酔さる。あふ飽ま。や。年采耳なれさる。己が子の聲と聞候つものう。開よとぬらば。おどて明白に聞えさる。此雪に寒けく。あふ歎。嗚呼の白徒さといひ懲らしつ。荒さる庭。揺揺たる雪の中道を。木履穿あめて。歩み出や。折戸と開かけ。吉次と見か。う見つ。怪しや。聲も面影も。紛ふべくもあらぬ。己が子なれど。身は腹巻と。小手脇當えつる。武者態の最勇さ。よ。此曉。飛蘭渡に戦ありと聞さる。若武者の物比具と。剣とりて。采さる。心ある人。道に違さるさへ。拾ひを。然ると。彼人の従卒と。知れから。引剝をる。即ち獸の心なり。とくもてゆきて。其主へ返さす。得こそ。裡へ入ますと。涙さし。ぐと忍すれば。吉次まをく。采果。こい狂人ありと。猜して。争す。微笑て。云や。老女聞け。せよ。似さる人。影あり。神の代よ。て。天稚日子の。阿遲志貴の神に似さる人の代。ふして。武内宿禰乃。壹岐直に似さるある。孔子乃。陽虎に似さる。何尚之と。顔延之。が。似さる。他人乃。猴似と。云も。是より出たり。己れ。誰に似さる。う。知ねど。東軍乃。軍監。瀬川

采女吉次と呼る、者なり。今曉敵將牛淵九郎清繩と追ふて。途ふ是と見失ひ。漫ふこ、へ
来れるなり。志むし慰いて。濡る衣をも乾せよう。大將軍に聞えあげて。十二分の報とま
べ。いうよ心と得たりと云ふ。老女の再び吉次を。と見かう見く。げと思ひ違へたり。東軍
乃軍監瀬川氏と宣ひまれば。何とやらん心ゆくし。え瀬川健三道孝と云人の子。乳名松
太郎と呼れたるふに非ずや。と問と。吉次聞もあへず。これの健三道孝乃冢子。松太郎と呼
きたるも乃なり。さて御身の實母。玉嶋ふく在せし。これこそ其玉嶋なれ。これく。計
らざる再會ぬりと。互に手ふ手とりあふて。母の水江乃浦島が子乃歸りし心持。子に又
宋乃宋壽昌が母ふあひぬる歡びよて。恩愛氣色よあらわれたり。其時玉嶋の袂に袂は纏う
ひし。目水を屢々押拭ひ。定に親子乃因縁端む。命あり春有りて。斯環會喜しきよ。己が身む
う。浦二郎と共に。此州に残りたる縁由の参々乃物語よて。よく知て坐をべた。離別乃
後も一度も。絶音づれ聞えざりし。正室木綿妙どの、爲端を信を世の中の。義理こうい
と。苦しけれ。されば此顯身の。息は内ふあふよしの。あらざりけりと思ふ思ひきや。々ふ

端なくもあんと。深に歎たにあらぬ火の鏡紫の果より薪樵。鎌倉山と出る月の。面へと
思ひ沈むら。其曉の寢覺寢覺て。廿年の癖を察し給へ。雙生のよく宵ものといへど。斯ま
て。兄弟乃露も違ひて宵ものうぬ。面影のこみ聲音まで何れと何と。己れ難しされむ御
身と浦二郎なりとして。物云つると笑ひ給ふな。同参の子ふいあれど。浦二郎の野山の
拵して。最寢去く見る影をたれど。孝行の人。勝まさ。弱き者よ。最稀なり。今もあれ歸り
来。斯と聞らば。さを歡び侍るべ。参も母御も恙なく在るふこそ。己が年波の寄
みはけても。いうよ老くごち給ひけん。見まくほしきよ。とかた口説む吉次聞て。何事も知て
坐をるの理なり。父も母も。いぬる文永五年の秋れ。他打續きて世を去り給ひ。其幸に。
北條殿の寵偶を蒙りて。近従ふゆされ。主命よよつて。近曾博多彌四郎が女兒。秋布と云少
女と娶りつ。然るは太宰の經高謀反の聞えあるふよつて。其軍監。擇出され。去年より矢
田の紀あり。總角のむうより母の事第が事。思ひ忘る。隙のな夕暮ど。己が父物堅くて。
音耗せんよも許し給はず。父世ふぬくなり給ひても。身の務に違なく。海山遠小隔居れば。



吉次雪天小
宿を捜

牛ふち九郎

思ふのみふて意お任せむ。此度不意當國へ来つるこそ幸なれ。逆徒誅伏の後、此便宜と
 もて必ず尋進せ。母も弟も、鎌倉へ將歸るべう思ひとるよ。天已が誠心を憐みて、仇と追
 夫婦が身はうりて。えやいくむく此年を經ると。初めて知て、いと哀悼堪ざりしが、忍
 地に云やう。あおこれおがらけうらすや。あまりに喜いと哀にうち終きて。内よご
 に伴ざりし。通宵路を走り給ひぬ。餓も疲勞もお給ひけぬ。まづ足と洗給へうし。といひう
 けて。忙しく庖福の方へ走り入り。鹽一桶の湯を汲入れ。此ともく出く料木なる竹林の
 ほとりにさしおかけ。吉次を押し立て。椀頬に尻をかけ。雪に氷りて固やうある。草鞋の紐と
 解折しも、紙窓と細やうに押開て。潛し張ふ者ありけり。是即ち牛淵九郎清繩なり。清繩驚
 吉次は追ま。飛龍渡へさへ歸り得ず。進退究て。玉島が家へ宿かり。瀬川は先ごちて。お
 くほりたる處はあり。とも知ずして吉次の。目今足と洗んどしはく。鹽ようつる面影と。信と
 見て刀に手をかけ。さて敵將牛淵も此處はありけるよ。といひせも果す玉島が。鹽とざぶ

とうち復せむ。彼處はもま窓の障子と内より襪と引とてさり。氣色と見せと玉島の心
 よもなれ笑ひは終らし。寔に親子の水入らず。今の湯はあまりに熱し。さし汲りて進らせ
 ん。といひつゝ桶と引提ぐ。立んとをるを吉次の。忙しく押留め。否湯は欲あう候ぬ。雪よ
 細りし。算の水こそ。潔けきと。さしよせ。鹽に受る滄浪の水ならぬ。に。に。に。洗ふ折
 しも浦二郎の。拂もあへぬ。雪の簑の下に。歌と擣て。歸り来つゝ。と見入るゝに。又ひとり此
 宿ありて。裡の容子の。平あらぬを不審。左右あくる走りも入らむ。折戸の蔭に立在て。あ
 し。閑窺居たりける。斯て吉次の。母に誘引きて。地炕のほとりに對ひ坐し。さて云やう。年米の
 志願を遂ぐ。かく環會進せされど。親子と雖も。おの。其志所あり。國の爲御身の爲
 に候へば。疾々出し給へと云。玉島聞て。小首と傾け。この心も得ぬ事と聞え給ふら。疾々出
 せといひ。その何を。といひも果ざるに吉次の。腰に著る牛淵が。鉦頭巾と取出し。某が所望
 の一種。即ち此頭巾の主なり。知て留め給ひし歟。又知て宿賃給ひしう。何のあれ朝敵繼
 高が軍師とる。牛淵九郎清繩を舍藏給ひて。浦二郎が。上もよほしからず。親子兄弟の義の

私なり。絆よりての第も。繩をかけざれば。吉次が軍監を承りたるうひも。不忠の人となりぬべし。とても腕まぬ天罰の。其首桶の。頭巾の孟子形。首受とらして給われ。ときし出まよ玉嶋の。手にだよとらす冷咲ひ。この思ひもかけぬ己が子の難題。御身より外の己が家よ。いお留ぬとあらがひ給ふとも。鹽ようつをし水鏡。楚と認る所望の首級。おほえらぎとぬくものし給ひぬ。興へ踏こみ搦捕べし。いかにやいかに。と結よまれば。母のどかくの反答なく。あふ寒や。とひとりごち。折焚柴のふいめどつ。吉次焦燥く刀引提つと立んとま折しも。やよ待給へ兄君と呼び留はく。浦二郎の物蔭よりあらわれ出。兼笠搔遣り捨く。慌しく裡入り。聽く吉次お對ひ云やう。幼れ時に別き奉りし。兄上お在るよし。只今彼處に竊聞して知り。理ある頭巾の首桶。此一歌の酒は易く。浦二郎は給ひらば。喜び思ふ所あり。と迷終つ。歌を兄よさしよすれば。吉次見く大に怒り。謂なれ弟が截斷。兄を侮る歌の狂水。清繩が首よ易よとい。いよく不審。思ふに。汝も經高よ心をよして。此條殿は冠すると覺し。忠義よの骨肉をも。思ひ易るの武士の常なり。絆よりての第といひさす。疾

く立と罵りて。歌と把り投着れば。酒ふのあらで。裡より出る。吉次が小刀と。浦二郎搔とつて。再び兄が不とりにさしおた。いうは兄上見給へりや。頭巾に易る此小刀の。己が幼き時。父の像見とて遣し給へる。此短刀と一對なり。御身牛淵が頭巾ととり給へば。牛淵又御身の小刀をとれり。然れば是送し差あり。只浦二郎が申を任して。彼ともて是に易。おはし見放し給ふとも。敢忠義乃虧損に非ず。承引給へりし。といひせも果す。吉次頭とうち押す。やをれ浦二郎。只一つ乃小刀と惜み。進詰る牛淵と放まべた。理おし。無益乃勸解聞に及ばす。いで討とらん。といたまきて。席路反して興乃方へ。走り入らんとすれば。玉嶋睡てこの間己たおし。と引袖と。ふり拂へば又とり搦る。浦二郎を撲地と突退て。岸破と隙間く蒸機と小楯よとり。牛淵九郎清繩。刀を引提て立塞り。健氣なり。瀬川采女。己れ經高が爲乃に。犬馬乃勞を竭まふ非ず。此條一家の。古主三浦泰村主乃仇なり。あまともて九州に跋渉して。頼大將實政と。撃得たりと。思ひ乃外却。汝は計られて。不覺ととりたるこそ。朽としけを。今汝が首ともて。今朝討したる兵士乃。冤魂と祀らすの。何乃時と期すべた。とわざたよわざた

瀬川龍幸に
牛淵と
戦ふ



牛淵九郎

十五

世川三郎



と尋思しあん。習得あらいえする間諜しのびの術じゆつともく、輒たやすく撃課うちおぼせたり。と思おもひの外ほか、却かへて吉次よしかふ謀はかられ、飛龍ひりゆう渡わたの舟ふねをさへ責敗せめやぶられ、既すでに進退しんたい究きゆうる。あゝ小脱おのがき来て討はかずも、姉玉あねたま島しま小環おほりあひ會あひあひ。瀬川せがわ健三けんざうが事こと。又また其その子供こどもの事ことと聞きて、思おもひあはする小實政さねまさが軍監ぐんかん。瀬川せがわ采女さいにょ吉次よしかの己おのが姪おひなる事ことと知し。とても死しまべた清繩きよづなが首かぶと、彼かの吉次よしかよりとらせんものと。浦うら浦うら二郎じらうと思おもふ程ほどを告つげ、采女さいにょが打うちかけたる小刀こがたともとし、矢田やたの方かたへ違ちがへたる。絆こたづ終つひは相違さういして、養育やしよくの恩おんの親おやも勝まさる姉あねの自害じがいもこれ故ゆゑと。思おもへばいと罪深つみふかた。身みの惡業あくごうに悔くひて、かへらす。清繩きよづな撃うちれりと聞きえなば、經高つねたかが滅ほろん事こと。踵かかとをめぐらすべからず。疾々さやく撃うちて高名こうなせよと。頂たきりさし伸のべ合掌がつしやうす。吉次よしかの初はじめて縁由このよと知してまま、嗟嘆さたん。幼いた時とき二親ふたおやの物語ものがたりも聞きけ事ことあり。己おのが實母うかのははの、其その初はじめ、領巾ひれ魔嶺まねの麓ふもとなる濱添はまぞひ何なにが、炊妻ひづめなるが人肉ひとにく經紀きよきは拐撃かどま。彼かの此この小呻吟さよひ。主人しゅじんの憐愍あはれみを得え、其家そのいへにありけるを。己おのが父母ふぼ、鏡かがみの神かみは示現しげんよつて、側室そばむと一ひと孀あはを産うまへと。己おのがさても赤間あかま関せきふて、惡棍わるそのふ奪うばひ去さられ。思おもはず離散りさんし給たまひたる。同胞どうぱう母子ぼし羊ひつぎと經へる。環會めりあひぬるうひもぬく。名告なれれば互たがひに讐敵あだがたき。よしや忠義ちゆうぎに立たたるとも、母はは喪うしなひ叔おぢと撃うちて、官

位俸ゐほう禄りくも何なにうせん。苦くるくたもの、武士ぶしの名なの、後のちの詳はなしなる。と身みと悔くひて撃うちかねたり。牛淵うしづみ聞きて聲こゑをふり立たて。この女め々々、瀬川せがわ采女さいにょ。清繩きよづなを撃うち漏もらして、後のちの軍功ぐんこうも徒いたづらならん。忠義ちゆうぎもす道みちやある。浦うら二郎じらうも諸共もろともに、これと撃うちて、反逆はんぎやくの餘類あまを脱ぬき、兄あに吉次よしかも從したがひ。鎌倉かまくら殿のの御感ごかんふあづられ。あどて刃やいばと當あて、といひ勵はげせ。浦うら二郎じらうの臉まへとあはたさた。死しのともあれ、某それがしの未いまだ仕つかへ、其そのの、叔おぢと撃うちべた義理ぎりもあし。此事このことの、許ゆるし給たまへと。承引うけひ氣け色しきなかりしかど、牛淵うしづみ大おほ焦燥しやうさう。彼かれも是これもいひがひあ。恩愛おんあいの已や難がたくて、己おのが姉あね自害じがい給たまへども、清繩きよづなと撃うちす。其そのの、死しも又またかひなれ、似にたり。いざさらば、牛淵うしづみ九郎くわうが刀やいばの切きあぢ。試こゝろん。といひもあへず。これと己おのが腹はらへぐさと突つたつる折をりも、門方かどより人ひとありて、吹ふきさむ笛ふえの音ね。さあがら龍りゆうの吟ぎんする如ごとく。怪あやしかり、清繩きよづなが痰口たんぐちより、一道いまだうの雲くも鼓あと立た升あり。又また霏あく々と降ふる雪ゆき。遂つひに碎くだれ玉たまの屑くず、或あるは神龍しんりゆうの空う宙ちゆうに戦たたひ。鱗うろこと散ちま、具ことならす親子おやこ同胞どうぱう諸共もろともに、ふりさけ見みれば、茅屋ちやうやの擔のの雲くもの簇はた手に目めをかけて、吉次よしか兄弟あに弟いつと立たあがり。傳つたへ聞き岬さか龍りゆう村むらの龍神りゆうじんの子こなるともて、其その子孫そのしそん今いまに至いたつ。腹はら下に黒子くろこあり。形かたち鱗うろこに似にたりと



十八
東京金屋村反社

や。今清繩の痰口より。雲氣立沖の。方に是。祖先の血脈とあらにをももの敷。あま奇なるも
 奇かりたりと。瞬もせむうち睡れば。母の苦し死息の下に。弟と子ども見うへりて。己が身
 むう。赤間関ふて。人内經紀ふ。拐撃され。速く此肥の州ふ。呻吟て。演添の焚妻とあり。始め
 より。秦村ぬいの。殘黨なれば。健三どの夫婦にまら。親同胞とも。故郷とも。明白ふの。告ざり
 が。廿年と經て。今こふ。終ふ。脱身ぬ。身の。惡業。古主の爲に。捨る命の。何惜むべた。あうにあ
 れ。子ゆゑの。闇に。夜乃。鶴。彼。笛竹乃。音を。聞くふも。嘆い。や。ます。哀別。離苦。是も。又。道。孝。主。木。綿
 妙どの。値。偶乃。思。役。ま。と思へ。あう。く。に。喜。く。侍。ると。か。き。口。説。苦。痛。よ。いと。演。る
 鮮血な。が。ら。乃。涙。なり。か。くの。吉。次。も。浦。二。郎。も。女。乃。心。を。思。ひ。涙。何。とい。の。間。の。苦。清。水。細。る。計
 比。玉。の。緒。を。業。も。ど。め。ぬ。終。焉。ふ。や。の。後。ま。と。清。繩。の。吉。次。は。對。て。屏。と。勵。一。己。れ。昨。夜。御。邊。ふ
 追。れ。さ。る。時。潛。ふ。是。を。相。ま。れ。ば。御。邊。遠。か。ら。ぞ。鎌。倉。小。歸。る。事。あり。ま。と。不。慮。の。厄。難。あり。是。と
 避。る。事。甚。難。一。只。八。の。弓。人。と。も。て。是。ふ。換。な。ば。其。禍。を。脱。免。す。の。こ。ろ。を。却。不。思。識。の。功
 と。と。つ。べ。し。此。事。豫。て。浦。二。郎。に。教。く。其。意。と。得。さ。し。た。れ。ば。彼。密。に。云。ある。べ。し。又。己。が。龍。神

より傳受せし一卷と傳んもの。御邊の外はありとも覺えず。今面あさり授んとすれば。朝敵
 さる清繩が手より物と受るの。傍難と厭ふ。あらん。よりて此一巻を。浦二郎にとらまると。速
 に兄は贈りて。孝悌を全せよ。といひうけて。彼一卷と搔廻。さし出す。腕定め。あく。手首ぬ
 る。へる。手負の。苦惱。浦二郎とつ。押。裁。た。斯。まで。義理を。思。ひ。給。い。ま。お。ど。て。鎌。倉。へ。降。参。し。後
 榮。計。り。給。い。ざる。とい。い。せ。も。米。す。服。と。眸。ろ。の。何。と。云。こ。と。を。始。あり。て。終。な。た。い。大。丈。夫。の
 所。爲。は。非。ず。い。ざ。吉。次。首。と。つ。實。政。の。實。檢。に。備。よ。とい。ひ。つ。と。刀。と。引。ま。い。せ。ば。門。なる。箭。と
 忽。地。は。吹。止。めて。高。や。う。鎌。倉。より。お。ん。使。と。呼。門。聲。に。吉。次。の。聲。猶。あ。う。ひ。て。閃。う。す。刀。の。下
 は。牛。淵。が。首。の。膝。下。に。撲。地。と。落。共。倒。る。玉。島。が。刀。と。拔。バ。息。絶。さ。り。吉。次。の。目。と。押。扶。ひ。刀
 と。お。さ。めて。牛。淵。が。首。級。と。頭。巾。に。楚。と。押。張。注。目。を。れ。ば。浦。二。郎。の。走。り。出。く。折。戸。と。開。く。思
 ひ。も。か。け。ず。博。多。倍。太。郎。從。者。僅。二。三。人。と。將。て。横。笛。と。雄。手。に。あ。つ。馳。て。進。み。入。り。上。坐。し
 押。さ。ほ。り。吉。次。に。對。て。云。や。う。時。宗。朝。臣。火。急。の。召。よ。よ。つ。て。御。使。と。承。り。夜。と。目。を。繼。て。今。曉
 到。着。鶴。は。實。政。ぬ。に。對。して。牛。淵。没。落。の。事。と。聞。御。邊。の。迹。を。追。ふ。て。こ。と。に。來。れる。折。も

屋の上は雲氣あり。事の爲射最怪しけきむ。旅中の徒然を慰んとて。搦る笛を吹く。試る
は。瀧龍庭より升て。雲に入る形の如し。當は是牛淵が隱家なめりと猜し。まづ外面より立在
る。裡の容子を張へば。牛淵既し誅伏す。皆是御邊の計策より出く。其功最稱讃するは堪
り。執權恩賜の錦の直垂。内室秋布の消息。こゝろあり。受おさめて倍太郎と共に。鎌倉へ参り
給ふべし。と説示せば。吉次の謹めて主命を承りて。速米の賜と拜受し。又秋布が書翰と
受とす。さう云やう。俄頃鎌倉へ召かへさる事。未ど其是非と思ひ已死まへむと雖も。君
恩斯迄ふ深々れば。あゝ死筋ふのあるべうらむ。まうりとも全く朝敵を責滅し。九州と掃
淨せし。鎌倉へ歸らん。最本意を死所爲かれど。固辭奉るよよしあり。こゝろ廿年米速
離る。實母玉嶋小環會あがら。彼義は仗し自害し。伏しんぬ。せめて野邊送の營と致をま
で。あはしの暇と放させ給へり。と希ふ。倍太郎聞て。かむりり此事の仔細及びむ。然
らば己れの矢田に退れ待たむ。心。徐は葬と。な果さまへ。と應つ。知ども知ぬおも
ちし。徐々と立歸り行。折目正し。死長袴の下括さへ。武士の毛。脇吹まる。雪風。路次の
疲勞と勤めて。式待して。分目送ぬ。

作者云前編三冊稿成。まづ刊行を。こゝに述る所稍央ふ過す。是より以下瀬川采女
鎌倉に赴く中途。殃危にあふ。及び瀬川浦二郎が傳博多彌四郎諺死の辨。若黨俊
平兼七が始終。秋布が艱難苦節。終は仇人鼠川嘉二郎。長城野兵太と撃く。名を海内
高し。其後俳優瀬川路考。采女夫婦が忠節心烈と。英才伶俐と。景慕し。瀬川と号し。濱村屋
と家稱せし事の終まで。後編に著すべし。



松浦佐用媛石魂録前編下巻終

